

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	北国の島の印象 <一般>
Author(s)	池田, 康雄
Citation	広大言語 , 10 : 53 - 54
Issue Date	1970-12-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046358
Right	
Relation	



(第二エピソード、オイディプス)と内なる罪の自覚を呼び起こす。決して消すことのできない内なる罪を認識したオイディプスは、自ら黄金の留金で、「自分の両の目ふかく、真向から突き刺」(エクソドス・報せの者)し、「みじめな自分を外界から遮断し、何もみえず、何も聞かぬように閉じこめて」(エクソドス、オイディプス)しまうことによって、「忌わしい思い出をさそう数々のものの、屈かぬところに心をすまわせ」(同上)ようとする。それは、内なる罪に対して、自ら罰を下し、そして生きぬかなければならないオイディプスにとって、唯一の残された道であると思われる。

知ることによって、自らの罪を自覚し、その罪に常に負目をおいながら、追われ生かなければならないのは、オイディプスだけでなく、私たちひとりひとりの運命ではないでしょうか。よりよく生きようとするのは、私の罪の自覚であり、私の過去ひとつひとつが、私のなかで往來しています。

(1970.11.3)

北 国 の 島 の 印 象

池 田 康 雄

1970年8月19日未明函館上陸以来約半月間、筆者は北海道の方々をHoboの如くさすらったが、観光地と名の付く所はいずこも観光客という名の雑踏が殺到しており、ユース・ホテルや旅館はパチンコ屋の張り紙を借用するほどの盛況であって、筆者の目的とする自然への逃避に至る所で迫害されたのである。しかし、北国の大自然はそんな失意の遊子を雄大に歓迎し、やさしく慰撫してくれた。ここでは最も印象深かった焼尻島の思い出をたどろうと思う。

焼尻島は、札幌から急行列車で4時間の羽幌の港から船で1時間余りの日本海上の、オロロン島で有名な天売島と夫婦の如く相並んで浮かぶ、面積5kmの緑の島である。広辞苑にも載っていないこの島を訪れたのは、8月29日午後1時前であった。函館から、札幌一利尻・礼文両島一綱走一知床一摩周湖・阿寒一糖平・然別湖一襟裳岬を廻って札幌の藪下先輩を再訪し、寝所を半分占領させて頂いて不眠の完壁を横目に熟睡し、翌朝、頭や爪等口に入る物総ての位置を冷蔵庫(先輩の所有物)を空にすべくリュック(筆者の所有物)に大移動させてから、意気揚々と同所を引揚げ、午前中も時間、汽車、バス、船を乗り継いだ後のことである。船客は天売島へ行く人が大部分で、降りる人は少なかった。リュックを港の売店のベンチに預かってもらいと、パンフレットを唯一の命

綱に島内一周に出かけた。島が小さいので二、三時間もあれば十分なので、5時の最終便で天売に行く予定だった。

港から10分も歩くと、白樺やトド松の林に入る。オンコの大庭林だそうだ。(オンコとはイチイの東北方言で、秋になると赤い実をつける) 那样的えば、樹々の間にそれらしきものが、申し訳程度に生えており、木洩れ日に小さな赤い実が輝いていた。この実は食用になるそうなので、例によって試食してみたが、まだ熟してなかったのかすっぱかった。この林には、公園風に散歩道が開拓されていて、ウグイスのいないウグイス谷だとか、数カ所しか曲折のない七転八起の松だとか、濁り淀んだ清流の河だとか、そういった所へ通じている。そして道が枝分れする度に標識が建設されているので、方向を間違えて回遊しがちである。又、所々にベンチがあって、時折カラスがあの声でB・G・Mを奏でてくれるので、イライラしがちな人の修行に最適な所だと思った。A ve cには向かないようだ。カラスの飛び立つ音でビックリさせられるから。

この林を抜けると一面の草原だった。急に展望が開けて海や本土、天売島なども見える。畑らしきものが続く中、10分も歩くと放牧場に出る。めんような容面の緬羊が草を食べていた。ふと思いつくことがあって、近くにいた手頃なやつを追っかけてみた。しかし、短い足してるくせに四つ足のためか逃げ足が速い。500mぐらい追っかけまわしたがとうとう捕えられなかった。羊毛を土産に出来なかったのは今もって残念である。息が切れたので草原にひっくり返って北方を見遣った。それまで気付かなかったが、利尻島の二等辺三角形の麗姿が水平線に浮かんでいる。空と島影と海の色相の異なる青色の対比がとても素晴らしい。太陽をサンサンと浴び、快い風に吹かれながら、草がグラスグラスなびく中で過ぎた数時間は、ハーベルスやメーエのレポートを例によって、切後数カ月して提出した時以上の、心し解放された心地だった。おかげで、天売行き最終便に乗り遅れ、この島にテントを翻らせる結果になったけれども。

しかし、キャンプ地を探し求めてさまよい続けていた時、船に乗り遅れたおかげで、紺碧の水平線に没する夕陽に会いすることが出来た。空をしないで茜色に染めながら、雲一つない遠方に姿を隠してゆく太陽。異郷の落日は感傷をそそるものであり、神々しいほどの荘厳さを感じさせるものであり、天涯の孤客が旅情を味わった最高のものであった。第一章終り

なお、この旅行では実にいろいろな人にお世話になったが、特に後で先程には並ならぬ迷惑をおかけした。この場を借りて、大槻君と共に深くおわびし、同時に御礼申し上げるものである。